

観心本尊抄副状

文永一〇年四月二六日 五二歳

帷^{かたびら}一つ、墨三長、筆五管^た給^{あわ}び候^{あわ}ひ了^{あわ}んぬ。観心の法門^{これ}少々之を註し、太田殿・教信御房等に奉る。此の事日蓮当身の大事なり。之を秘して無二の志を見ば之を開拓せらるべきか。此の書は難多く答へ少なし、未聞^{みもん}の事なれば人の耳目^{しもく}之を驚動^{きょうどう}すべきか。設^{たと}ひ他見に及ぶとも、三人四人座を並べて之を読むこと勿^{なか}れ。仏滅後二千二百二十余年、未^{いま}だ此の書の心有らず、国難を顧^{かえり}みず五五百歳を期して之を演説^こす。乞ひ願はくば一見^こを歴^へきたるの輩、師弟共に靈山浄土に詣^{もつ}でて、三仏の顔貌^{げんみょう}を拝見したてまつらん。恐々謹言。

文永十年^{太歳}癸酉卯月廿六日

日 蓮 花 押

富木殿御返事